

大崎直太先生との出会い (2011.6.24)

鮎が沢山釣れたから持って帰らないかと電話をもらったので、びわ湖バレイの帰りに弟の家の前に車を止めて下車したところ捕虫網を持った人がこちらに歩いて来るのが目にとまりました。使い古したアルミポールの本格的な捕虫網で、網以外は何も所持しておらず、その真っ黒に日焼けした風貌からますます気になってつい声をかけてしまったのです。

「なにか面白いものがありますか？」

「いえ、面白いというわけでもないんですが、スジグロシロチョウですよ」と言って、なぜスジグロシロチョウを探しているのか説明して下さるのだが、専門的な分野のお話なので何度も質問しているうちに「近くだからうちの庭を見ながらお話ししましょうか」と言う事になり、庭でお茶をご馳走になりました。

「最近寄稿した雑誌です」と言って戴いたのは、私は初めて手にする『世界思想』(学術専門書・教養書、世界思想社・2011年春・38号)で、『虚構と真実』をテーマとした特集号でした。そして目の前の著者は京大農学部の大崎直太準教授で、昆虫生態学を専攻しておられることが分かりました。とりあえず文章を読み始めたのですが、二回読み返しても良くは理解できないことが分かり、正直に「家でゆっくり拝読します」と言って本を閉じました。

掲載された論文は、「昆虫たちの虚構—擬態と進化」と題して、ダーウィンの進化論と関連して擬態を考察した内容でしたが、スジグロシロチョウは擬態とは関係なく、モンシロチョウ、エゾスジグロシロチョウの三者の間で食草の競合が起こり、「良い食草」を強い(大きい)エゾスジグロシロチョウが独占しているという仮説を検証するために必要だとのことでした。その場合も「良い食草」とはどういう食草を指すのかと尋ねるものだから、雑草園の庭の片隅に行って、北海道から持ち帰ったというイヌガラシの一種を手に取り、「外来種ですが、細い葉がからみついでいて、この中に青虫がいても、外敵にはなかなか見つからんでしょう」と、手にとっておしえて下さる。一番の害敵は鳥なのだそうです。

帰宅して調べてみると、古くは日高敏隆先生が団長になって10年余にわたって遠征されたボルネオ調査日高隊のメンバーであることも分かりました。手元にある『ボルネオの生きものたち・日高敏隆・石井実編著』は藤井 恒さんから頂いたものです。

しかし、私をお茶に呼んで下さった意図は他にあったようで、「福田晴夫さんは今どうしていますか」と聞かれました。大崎直太先生は鹿児島大学農学部出身で、アサギマダラの調査草創期に、「一緒にやりませんか」と福田晴夫さんに誘われたのだそうです。その時は「一般市民の楽しみを奪うのは良くないから・・・」と断ったと言っておられました。アサギ

マダラの調査研究はまさにその通りの展開になって、今や教育効果の高い有用昆虫として認識されています。

大崎直太先生は伊丹市昆虫館のドームを使って実験や研究をしておられるそうです。奥山清一さんや古本敦子さんなどのその他のスタッフについても良くご存知でした。もちろん毎年、伊丹市昆虫館友の会のマーキング会をびわ湖バレイでやっていただいていることもお話ししました。

前記『ボルネオの生きものたち』には、大崎先生のレポートがトップに書かれており、「カンポン・ブンシット、そしてチョウの体温調節」には、アサギマダラを長年観察してきて疑問に思っていた生態や行動について、納得できるいくつかのヒントが書かれておりました。

(2011.6.27 記)